

## 令和5年度 庄内創生懇談会 発言要旨

- 日 時：令和6年3月22日（金） 15：30～17：00
- 場 所：庄内総合支庁 4階 講堂
- テーマ：「地域における課題と今後の施策展開の方向性」

### 【1巡目】 自己紹介及びそれぞれの分野における現状や取組みについて

#### 【伊藤 大貴 氏】（合同会社dano 共同代表）

- ・地域企業に対するデジタルマーケティングの支援と地域の教育プロジェクトの伴走支援の二つを柱とする合同会社を起業して6年目になる。平成の大合併や東日本大震災を経験し、どうやって地域の未来を作っていくかということを考えた時に、ふるさとの庄内で仲間づくりを加速させていくことをテーマに起業に至った。
- ・6年くらい前から山形県立遊佐高校における県外留学の取組みに携わっていて、地域おこし協力隊出身の方と一緒に、東京や大阪から移り住んで高校生活を送りたいという子たちの受け入れや学ぶ環境の整備をしている。
- ・山形県の魅力的な自然や文化、人間関係を生かしながら次世代の育成をどうしていくか考えながら取り組んでいる。

#### 【小林 怜奈 氏】（東北公益文科大学 公益学部2年）

- ・鶴岡市出身で、高校生のかきに慶應義塾大学の先端生命科学研究所でクマムシという小さい虫の研究をしていた。
- ・そこでベンチャー企業の誕生やたくさんの技術を持った方が集まってくるのを見て、人と人とを繋ぎ庄内に人を呼ぶような職業に就きたいという思いと地元に残りたいという動機で公益文科大学に進学した。今は国際関係論として、どのように人を呼ぶか、繋がっていくかということを学んでいる。
- ・先ほどお話しされた伊藤さんとは、県の「次世代の地域人材育成事業」で一緒に青年ファシリテーターをしており、三川町で活動している「来夢来人」という中高生ボランティアサークルにアドバイスを行うなど、地域の高校生や学生と繋がった活動をしている。

#### 【瀬尾 利加子 氏】（株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役）

- ・地域共生社会や地域包括ケアの実現に向けて、医療介護の領域で起きている問題の課題解決に取り組むため、会社を立ち上げて7年目になる。
- ・去年からは、一般社団法人「みどりまち文庫」も立ち上げて、鶴岡銀座商店街に医療従事者と住民が交流できる場を作り、コワーキングスペースのようなイメージで運営し、健康なうちから医療や介護情報に対する興味関心を高めてほしいと思いながら活動をしている。

- ・地域食材を使った嚙下食を考える研究会も立ち上げ、地域の中で嚙下食を食べられるお店を増やす取組みを鶴岡市の協力もいただきながら行っている。全国に広げていくことも必要なので、各地でこういった取組みをしている方、料理人の皆さんとのネットワークを作ろうと準備を進めている。

**【高橋 身依 氏】**（Hi-Farm 代表）

- ・酒田市で農業をやっており、自身で生産した農産物や地元で採れたフルーツを使って、ジャムや漬物などの6次産業化に取り組んでいる。普段は、イチゴ、大根、ほうれん草、お盆のお花などを作っていて、ほとんど畑にいるような生活をしている。
- ・農業に従事している女性の声を農業経営に活かせるよう、JA庄内みどりの理事として活動しているほか、農業女子会「すくすくアグリネット」のメンバーとして、月に数回のファーマーズマーケットや野菜の宅配などを行っている。

**【林 浩一郎 氏】**（林建設工業株式会社 代表取締役社長）

- ・酒田市で創業1919年、今年105年目の建設会社の代表取締役をしている。
- ・建設業は女性の就職率が低い業種の代表だが、近年は官民挙げて女性の雇用促進を進めていて、我が社でも10年前までは現場で働く女性は2人しかいなかったが、現在は8名と少しずつ増えてきている。
- ・女性の声、若者の声を聞いていく中で、例えば制服とか細かいことから女性が働きやすい環境づくりを始めている。また、業界全体として男性の育児休業にも力を入れており、女性だけではなく男性も手伝って会社もそれを手伝うという考え方を醸成することが非常に大事だと思う。
- ・仕事内容の広報媒体として、YouTube やインスタグラムを活用しているが、少子高齢化の進展に伴い新卒者が減少する中、さらに地元就職希望者が減るのではないかと危惧している。特に建設業は若者に敬遠されやすい業種なので、建設業の魅力をどのように伝えるかが一番の課題である。

**【矢野 慶汰 氏】**（若葉旅館 代表取締役社長）

- ・東京から酒田に移り住んで9年目を迎える。それまでは、東京でアウトバウンド専門の旅行代理店に15年ほど勤め、153か国を歴訪してきた。庄内での生活において、外から来た者の客観的目線を忘れずに、ご来庄される方たちの気持ちに寄り添ったおもてなしで旅館運営を心がけている。
- ・また、酒田商工会議所青年部の会長として、地域の生産責任世代、地元の事業承継予定者等の会員約100人と共に、どのように消費者人口、購買人口を維持拡大してゆくか、増やしていくか、というようなことを日々楽しみながら考えている。
- ・一昨年からは、山形県洋上風力設置検討委員会の委員も拝命し、酒田市沖が2023年10月に有望な区域に指定されたが、同時に地域にどのようなメリットがあり、また課題があるのかということを経営の皆さんと日々勉強させていただいている。

- ・酒田市国際交流協会アドバイザーとしては、インバウンドで訪れる方だけでなく、酒田に住む 100 名を超える在日外国人の方たちが、多様性の中でウェルビーイング的で住みやすい街をどのように作っているか、官民一体となって考えている。

**【山崎 侑斗 氏】（合同会社東北プライド 代表）**

- ・酒田市内で合同会社を経営している。秋田県能代市出身で酒田に移住して 10 年目になる。東北公益文科大学入学をきっかけに初めて山形県に来て、大学の「酒田おもてなし隊」というサークルで、酒田の魅力を伝えるガイドの経験を通じ山形を好きになり移住を決意した。
- ・学生時代に起業し、酒田の魅力、山形魅力を発信するツールとして始めたのが飲食店だったが、コロナの影響で他のお店同様に大きな影響を受けた。飲みたくてもお店に行けず、家で楽しむ方が増えたことや可処分所得が減ったこともあるかもしれないが、タクシーや代行がつかまらないことも非常に大きな問題だと思っていて、タクシーを 40 分以上待つと言ったら、観光面での印象も良くないのではないかと心配している。
- ・また、山形はラーメン県そば王国を標榜しているが、最近はラーメンの値段も高くなってきており、県産小麦を使うなど地産地消の取組みも必要だと考える。

**【山科 沙織 氏】（The Hidden Japan 合同会社 代表）**

- ・三川町出身で、7 年前にインバウンド向け旅行、プロモーションを行う会社を立ち上げた。特に欧・米・豪といった英語圏をターゲットに、旅行商品の企画、販売、プロモーションを行っている。山形県を拠点とする旅行会社だが、第 2 種旅行業を持っており、全国をカバーする旅を提供している。現在、日本人スタッフの他、アメリカ人、オーストラリア人の外国人を雇用し、全員が山形で暮らしている。社名であるヒドゥン・ジャパンは、日本の隠れた魅力という意味で、まだまだ知られていない山形の魅力を世界に発信している。
- ・ツアープランニングのほか、自社でガイドができることも強みで、地域の事業者の方々と連携したコンテンツの提供を重視している。
- ・コロナが明けてから、ツアーのリクエストは日々増えており、欧・米・豪だけでなく、シンガポール、タイ、マレーシアのお客様からの問い合わせも最近は増えている。
- ・1 年半前に山形市にも支店を開設し、山形県全域でのツアーを展開している。先日もアメリカからのお客様が山形県に 5 泊し、広域でツアーを行った。庄内滞在時には豊かな自然に特に魅了されたと聞いている。

【伊藤 大貴 氏】（合同会社dano 共同代表）

- ・先行きの見えない社会において、クリエイティブに未来を切り開いていくにはどうしたら良いのか、ということテーマに様々な事業に関わらせていただいているが、対話の場の雰囲気づくりが非常に大事だと考える。
- ・会議でも教育の現場でも、一方通行でなく、その内容が創発的にその人の本来性、内から湧いてくるものであることが非常に重視されていて、緊張せずしゃべれる場が理想的なのではないかと感じている。
- ・また、ビジネスにおいても学校の現場においても、皆さん非常によく頑張っていて、山形県は手を抜いてる人が少ないと感じるが、一方で集団としては噛み合っていないとか、クリエイティブに新しい発想に踏み出せないということも感じている、対話の文化形成において何が重要なのかを考えることが多くなっている。
- ・その弊害の一つとして、メンタル的な不調が非常に多いと感じている、価値観の違いに対しそこに対話の土壌がないことで、間にいる人が擦り切れてしまう構造があるのではないかと。時代の変化とともに、これまでの危機感や勝利のために頑張る努力を重ねるといふ価値観から、その人らしさや集団としての学びが求められる価値観の両方が混在している中で、自分らしく弱音も吐いていいし、自分らしくやっているとやられつつ、締め切りや授業をどうするのかと両方言われていると、ダブルスタンダードに悩まされ体調を崩す方が多いように感じている、その課題に対してもやはり対話が非常に重要だと考える。

【小林 怜奈 氏】（東北公益文科大学 公益学部2年）

- ・ゼミの研究活動では、例えば海外での成長企業でも、自然がとても豊かなところにポツンと大きい企業があったりするので、そこで暮らし働く人たちは一体どのように生活をしているのかを調べて卒論にしたい。
- ・関西や関東方面に行った友達でも、庄内には何も無いと言う人が多いが、実は何も無いところがすごくいいと思っていて、仕事に打ち込める環境やインスピレーションが湧いてくる場所ではないかと思う。
- ・この庄内を活性化させるためには、外部から人を呼び込むことも必要で、先端生命科学研究所でもこちらに来て移住を決めたという方が多くて、そういう方は一体どういふところに魅力を感じたのか、どうしてこの庄内で生きていこうと決断をしたのかということ、いろんな方と関わりながら学んでいきたい。
- ・今後、取り組んでいくべき視点としては、東北公益文科大学や山形大学など地元で学んで欲しいと思う大人が結構多いと聞いているが、やはり都会に行きたい学生も多く、その中でも庄内に戻りたい、あるいは留まりたいという学生も一定数いて、その違いは、学生時代にどのくらい地域に関わって活動してきたかというところが大きいのではないかと考える。

- ・高校時代からいろいろな人と関わって、庄内にこういういいところがあるんだとか、ボランティア活動を通じて地域の人と関わって、この庄内をより良くしていきたいという強い思いを持った方が、将来戻ってきてくれたり、地元就職しようと思うのではないかと考えていて、自分の兄弟にも庄内に居たいと思えるような、地域の温かさとかを感じて欲しいと思う。
- ・学生にいろんな企業と関わりを持たせる活動や部活動と同じように地域と関わる活動というものがもっと増えていけば、地域に対する思いが膨らんで、地元に戻ってきてくれる学生も多くなるのではないかと考える。

**【瀬尾 利加子 氏】（株式会社瀬尾医療連携事務所 代表取締役）**

- ・病院や診療所だけではなく人材も含めた地域医療の危機的状況が、どの程度地域の皆さんに伝わっているのか不安に思う。健康な方々の多くは自分や家族が病気になったときに気が付くような状況で、特に鶴岡の場合は産科小児科また慢性期病院が待たなしであるが、病院や医師会任せになっているように感じている。
- ・他県では、例えばITと医療介護、または認知症といった新しいビジネスを創出する企画が実施されおり、本県でも医療や介護分野に関して、課題を知りたいとか役に立ちたいという住民や企業は少なからずいるので、商工会議所や医療介護従事者も含め、少子高齢化社会における医療介護分野の課題解決に特化したビジネス創出イベントを実施できたらいいのではないかと。
- ・医師看護師等の医療者不足については、各方面で取り組んでいるが、なかなか効果が出ていない状況もあり、住民の皆さんの協力が得られるよう、また一緒に考えられる機会として、鶴岡市で地域医療サポーターキックオフ会というものを開催している。
- ・また、小児の発達障害児が増加している中、庄内には診察や治療ができる専門医、専門看護師が少ないということが課題としてあり、診察までの予約待機や内陸に行かないといけなようなケースも多く、不安を抱える方が多くなっている。庄内地域でも、早期の診察や療育訓練などが行える体制が必要だと考える。
- ・高齢化の進展により、今後、世界中で高齢化が進むので、ますます嚥下食の重要性が高まる中、嚥下食と外食、観光などのビジネスに繋げ、山形の食文化を活かし美味しい食材を取り入れた高齢者食、嚥下食の開発を進めていけたらいいのではないかと。
- ・旅館の方々からは、バリアフリー等に対応した施設に改装するのが難しいという声や障がいを持った方への対応が不安だとのお話も聞いているので、そういった方々と勉強会を行うなど、意識改革の取組みも必要だと考える。

**【高橋 身依 氏】（Hi-Farm 代表）**

- ・農業分野における課題は様々あるが、商談会やファーマーズマーケットといったイベントやスキルアップセミナーなどは内陸の山形市で行われていることが多いため、車で内陸に行かなければならないが、特に冬場は庄内から月山を越えて行くのが大変で、その課題が非常に大きいと感じている。内陸と庄内との交通の利便性が向上すれば、例えば販路拡大に向けて安全に仙台と行き来することもできるのではないかと。

- ・もう一点は、高騰している生産資材や燃料などのコストを農産物価格に転嫁できていないということがある。補助金はとてもありがたく助かっているが、無理に規模拡大で大型農業機械を導入しなくても、本来であれば農産物を生産してその収益で生活できることが理想で、家族経営でも安定した収入で安心して将来を描けるような山形県になってほしいと思う。これは、市場の仕組みの問題であるが、農家は自分で農産物の価格を決められないことが多く、出荷するまで値段が分からなかったり量も不安定だったりするので、肥料や燃料が値上がりしている中でも、農業で安心して子どもを育てることができるようになればいいと思う。

**【林 浩一郎 氏】（林建設工業株式会社 代表取締役社長）**

- ・今、高橋さんから道路の関係のお話いただいたが、我々もこの道路交通網の整備促進というのは、この地域の発展にはなくてはならないものだと考える。日沿道に関しては、新潟県境も秋田県境も順調に動いており、それに加えて国道 47 号のウエストラインの方も繋がれば非常に大きな効果があると思う。先ほど高橋さんがおっしゃったように、例えば、石巻に向けて庄内の野菜を積んで朝出発すれば、昼には降ろせるという環境が実現できる可能性がある。
- ・また、この地域の発展には若者の定着を進めていかなければならないと思うが、建設業は外での作業がメインなので、その負担を軽くするために、建設DXに取り組むことで人手不足を補い、危険作業のリスクを下げ、遠隔地からの現場管理を行うなど、若者や女性の方でも親しみやすい仕事にすることが必須になる。
- ・洋上風力については、遊佐沖と酒田沖で計画が進んでおると聞き及んでいるが、余剰エネルギーを使い、農業や漁業の新たな創出や新エネルギーの水素基地など、まだまだ発展の余地があると感じていて、こういったことを発信していくことが一番大事だと考える。
- ・国土交通省が公表している都道府県別の経済的豊かさランキングでは、山形県は東北で1位、全国でも4位となっており、こういった情報をもっと発信していく必要があり、知っていただくことがU I Jターンに響いてくるのではないかと。
- ・また、空家等対策特別措置法が去年の12月に改正されたが、これもチャンスと捉え、使える空き家を活用してもらうため、自分たちでのDIYを前提に若い方に安く提供し、地域の建設業者がバックアップしていく、そんな場が作れば、楽しみがある地域ということで活性化にも繋がるのではないかと業界でも話をしているところである。

**【矢野 慶汰 氏】（若葉旅館 代表取締役社長）**

- ・国道 47 号線のウエストラインは、太平洋と日本海の距離が最も短いところなので、より安全な高規格の道路を作ることによって、多くの人口の流入が見込めるのではないかと。季節問わず、移動の安全性を担保できることで、冬の酒田に寒だら汁を食べに行こうとか、そういう考えにも繋がりますよと思っており、大いに期待している。
- ・道路はそもそも大規模災害の際には、ライフラインになり、東西のルートを確保するというのは、費用対効果だけでは計れない価値がある。酒田商工会議所青年部では、

東日本大震災のときに 47 号線を通して石巻、古川に物資を送り続けてきた経験から、命の道としての重要性を非常に強く感じている。新庄から先の古川の高規格化の計画化も、引き続きお力添えをいただきたい。

- ・若葉旅館に来るお客様は、夏は自転車で全国を旅する方も多く、また、最近インバウンドの方々など雪道に慣れてない方が、仙台空港あたりでレンタカーを借りて東北 6 県を回ることもあるので、非常に危険。高規格道路ができれば自転車もインバウンドの方も安心して運転ができ、地元の方が巻き込まれるリスクも減るのではないかと考える。
- ・先ほど山崎さんがおっしゃっていたが、最近酒田は慢性的な代行、タクシー難民という問題が顕著になっている。昨年の暮れから、忘年会、新年会シーズンにお客様が戻ってきたことは大変嬉しいが、代行、タクシーがつかまりにくいと夜の懇親会を敬遠する可能性も出てきて、ややもすると街にお金が落ちなくなる可能性もあり、AI によるライドシェアなど、皆さんの知恵を借りながら手を打つ必要がある。
- ・酒田をはじめ地方都市の大人は地元「何もない」という言葉を安易に使う。だが、商工会議所青年部の会長になってからは、本当に何もないのか、ということを再度、青年経済人の仲間と共に考える機会を設け、酒田飽海地区の教育委員会と今はふるさと教育の提携をして、総合的な学習の時間に出前授業をさせていただく形となった。地域の未来を担う酒田の子どもたちを目の前にして「何もない」といたずらに言えない雰囲気にはなっている。これからも、地域の皆さんと一緒に、何もないじゃなくて何かあるのかということを探求していきたいと思う。

#### 【山崎 侑斗 氏】（合同会社東北プライド 代表）

- ・矢野さんもおっしゃっていたように、私も酒田が一番代行やタクシーがつかまらないと思う。運転代行配車プラットフォームを開発しアプリで運用している企業があり、そういったアプリの導入も課題を解決する一つの方法だと思う。我々飲食業からすると、日本人ならではのおもてなしではあるが、お店が代行やタクシーを手配する手間により効率は落ちてしまうので、そのようなツールがあれば、お客様自身で手配ができていいのではないかなと思う。お盆や年末年始には、若者が帰ってきて遅くまで飲んで楽しみたい方もいるので、行政でもそういった企業と提携するなど、安心安全に自宅に帰れる社会になるよう進めていただきたい。
- ・もう一つは、先ほど伊藤さんも教育のお話しをされていたが、私が大学時代に研究テーマとして掲げたのがシビックプライドだった。地元の人が地元のことを知らないことも多く、YouTube で小さい子どもでもわかるように庄内の正しい歴史を伝える番組を発信している。地域の宝は子ども達だと思っており、経済も大事だが、根本的な教育を間違えると地域の未来にも影響するので、教育によって明るく豊かな子どもたちを増やしていきたい。

**【山科 沙織 氏】**（The Hidden Japan 合同会社 代表）

- ・より広域的な観光を展開することにより、山形県内の滞在時間と消費額の拡大を図っていく必要がある。
- ・深く良いコンテンツを提供し山形にもっと人を呼ぶためには、単体の体験コンテンツではなくツアー全体をコーディネートすることが必要で、日本各地を含めてツアーをプランニングしているが、欧・米・豪の方の場合、10日から2週間の滞在期間が多く、東京都や他の都市からどのように山形、庄内に繋げていくかというのが課題となる。最初から山形に行きたいというリクエストはまだ少ないが、10日から2週間の滞在があれば、東京以外にも行く余裕があり、例えば食に興味のあるお客様には、鶴岡は日本で初めてのユネスコ食文化創造都市で、そこで農業体験をして自分で収穫した野菜を地域の料理人と一緒に料理体験してみないかとか、長年続く醤油や酒蔵、現場の工場を巡るような発酵文化ツアーがあるけどどうか、ということをご提案すると庄内、山形を行程に入れてくれるお客様も多い。
- ・また、観光客が訪れたい場所になるためには、ここ山形に住む人が誇りを持ってその魅力を発信できることが求められるため、観光人材の育成にも力を入れていきたい。最近、高校と連携して高校生の通訳ボランティアをスタートした。先日もアメリカからのお客様に3名の生徒から参加していただいたが、人材不足と言われている中で、学生時代からこのような体験、経験ができることは、将来的にガイドや観光に携わる人材に繋がるのではないかと考える。
- ・学生にとっても将来の選択肢を増やすことになり、たとえ進学等で県外に出たとしても、また戻って山形で働きたいという思いに繋がり、山形県の観光産業の発展のためにも、長期的にこのようなグローバル人材の育成にも力を入れていく必要がある。
- ・庄内には大型クルーズ船も来ていて、今後もインバウンド観光が盛り上がっていくと思うが、もっと庄内に来てもらうため、庄内を知ってもらうためには継続した情報発信が必要だと考える。自社でも取り組むが、県としても海外へ向けた庄内、山形の観光に関する情報発信に取り組んでいただきたい。